

シン・バリアフリー

建築士とリハビリテーション専門職によるバリアフリー特化型サポートプロジェクト

シン・バリアフリー

建築×リハ

2022年7月

【なぜ企画をしたのか】

- ・都市の再開発やまちづくりにはリハビリテーションの視点が足りない。
- ・いままでのバリアフリーは利用する側のニーズが正しく理解されていない。
- ・生活期のリハビリ専門職の社会を良くするスキルを広く知ってほしい。

【現状の分析】

〈まちづくり〉

現在の社会環境はマジョリティ優位な社会となっている。
多様性社会では弱者の視点で考えて、**弱者優位**でつくっていかなければいけない。

〈高齢者・障がい者〉

今のバリアフリーは不十分で、**安全に外出することができていない。**

〈リハビリテーション〉

生活期リハビリテーションの専門職である作業療法士・理学療法士は、高齢者や障がい者の生活のしづらさ、疾患・健康状態と環境の関係性など、暮らしに直結した情報を多く持っている。しかしながらまちづくりの領域でその情報を活用することができていない。

【問題点と課題】

リハビリテーションの目的は「人と環境の関係性改善を図り、普通に出来ることを増やすこと」である。しかしながら一般的にリハビリというと機能訓練を思い浮かべる人が多い。こうした誤解もあり多様性が大事なまちづくりにおいて、環境整備の専門家であるリハビリテーションの視点が活用されていない。

高齢者や障がい者が求めるバリアフリーは「誰にも頼らずに活動・参加が叶う」ものである。当事者の課題を解決しようとする場合、まず生活の実態を把握してイシューを見極めなければならない。この時に専門的な視点が無いと、思い込みや憶測で捉えたイシューとなり、その結果本質と外れた対策となってしまう。いくらバリアフリーや高齢化対策を行っても、視点がずれてしまうと、すべての人が参加できる持続可能なまちづくりにはならない。現状のバリアフリー対策ではイシューの見極めが不十分であることが課題といえる。

【目的・ねらい】

加齢による衰えは歳を取れば誰もが必ず経験するものであり、また若くして障がい者となる可能性は誰にでもある。高齢者や障がい者の問題は他人ごとではない。環境づくりのためには異業種、異分野が持つ技術や知識を組み合わせた協業が必要だ。特に高齢者や障がい者への対策については生活期リハビリテーションの専門知識が必要不可欠である。まちづくりのプロジェクトにおいてリハビリテーション専門職の強みは、当事者の持つ個々の課題を当事者と共有していること、さらに専門知識を用いて未来を予測した課題を考えられることである。リハビリテーション専門職と建築士、そして各方面のプロジェクトチームで高齢者や障がい者の生活課題と解決方法のアイデアを共有することで、高齢者・障がい者が本当に求めるバリアフリーの社会実装を実現させる。

【3つの共通原則 と シン・バリアフリー】

シチズン・イニシアティブ

多様な人と人が集うためには、安心して出ていける環境が必要。高齢者や障がい者がまちに出ていけない原因は身体機能だけではなく、環境によるバリア、そしてバリアに対する精神的不安。まずは出ていこうという気持ちになれる環境整備を。

スティナブル

この先手を加えなくても持続可能な環境をつくり、「どんな人でも自分の意思で、誰にも頼ることなく暮らせる環境」を作るのがシン・バリアフリー。バリアを補う後付けのバリアフリーではなく、はじめからデザインされた当たり前に存在するバリアフリーを目指す。

包摂 インクルーシブ

誰もが主体的に参加できる地域として多様性の包括化を考える時に、単に互いに助け合うだけでは足りない。高齢者も障がい者も基本的には人の世話にはなりたくない、人に世話をかけてまで出かけたくないと思っている。最も大切なバリアフリーは”誰の手も借りずに生活ができる環境”をつくること。それこそが助け合いの初めの一歩となる。

【構成メンバー】

田中匠作（作業療法士）、石川達也（理学療法士）、佐伯瑞穂（理学療法士）、
鶴岡真由子（作業療法士）、吉野香菜（理学療法士）
小野澤裕子（一級建築士）、川口孝男（一級建築士）、横山眞理（二級建築士）